

殺虫剤工業会、創立40周年記念式典開催 「我々のポジションを再確認」

日本家庭用殺虫剤工業会は6月16日、京都のウェスティン都ホテル京都で創立40周年記念式典を開催し会員、賛助会員、来賓など140名が参加した。会は、宮門専務理事の司会で進行。そして、第一部の記念講演会では、電通総研ヒューマン・インサイト研究部主任研究員の大屋洋子氏による講演「『いま』を読みとくキーワード」と題して「ホメ」、「ダケ」、「タメ」という3つのキーワードを基に、生活スタイルなどの変化について様々な話が行われた。

少憩の後、記念パーティーが行われ、はじめに上山直英会長（大日本除虫菊社長）が以下の概要のあいさつを述べた。「1938年にスイスでDDTが開発されるまで世界では殺虫剤の原料は除虫菊しかなかった。その除虫菊は明治時代に日本に入ってきて日本で蚊取線香が発明され、その栽培が盛んになり、昭和のはじめころには輸出世界一となった。第2次世界大戦後、除虫菊に含まれる有効成分のピレスロイドの化学構造を基に、当会の特別会員である住友化学が製品化に成功。

そして、昭和32年に除虫菊の栽培普及と家庭用殺虫剤の販売を行っていた18社が日本除虫菊工業会を設立し、昭和46年に日本除虫菊研究所を併合して日本殺虫剤工業会が設立され、10年前に現在の日本家庭用殺虫剤工業会の名称となった。有効殺虫成分の開発、さらに蚊取線香、マット、液体かとり、くん煙剤などの商品化も日本が世界に先駆けて行ったものであり、日本の殺虫剤産業は、世界の先端を進み発展を遂げてきた。ただ日本ではこの業界は、決して大きなものではないし、将来の人口減少なども懸念されている。しかし我々の業界は、歴史の古い会員が多く、長く続いてきた技術の蓄積もあり、さらにそれぞれが創意工夫を凝らして様々な商品を開発してきたという強みを持っている。

昔に比べて虫も減ったのではという話もあるが、都市化や温暖化が進み、冬でも暖かい場所が増え、蚊が発生し、また虫に対する現代人の感受性も昔より敏感になってきている。さらに世界的に見ればデング熱やマラリアを媒介する蚊の生息範囲がだんだんと北上し、またアメリカでの西ナイル熱も続いている。我々工業会の目的とするところは、水際でこうした病気の蔓延を防ぎ、またその製品を開発し、より安全に使ってもらうための知識を広げることである。当初、30社で発足したこの工業会は現在32社となっている。

今年は東日本大震災があり、大変なときにこういう会を開くこともどうかという意見もあったが、復興、そして節電が言われる中で、我々がお役に立てる部分もあると考えている。また、こういう時であるからこそ我々のポジションを再確認し、引き続きお役に立てるよう頑張っていきたいと考えている」

続いて来賓の紹介、そして来賓を代表して大阪府健康福祉部業務課山本課長、住友化学福林専務のあいさつ、さらに全卸連の森友会長の乾杯で開宴となり、懐かしい工業会OBなども顔を出した記念パーティーは、和やかに歓談が続いた後、大塚達也副会長（アース製薬社長）の中締めで散会となった。